四季録

旅

我が家に白黒テレビが入って間もない1961年頃。アメリカのドラマ「ルート66」が毎週放映されていた。2人のナイスガイがコルベットに乗って旅をする。流れ行く先々で恋あり事件ありの、冒険譚ロードムービー。

僕は10歳前後、初めて旅というものを意識した。目新しい外国のハイウェイや町で繰り広げられる物語に夢中で見入る。それは思春期へのロードでもあった。

そして中学2年を終えた春休み、僕も現実の旅に出た。はやり始めていたドロップハンドルのギア付き自転車に乗り、同級生3人で百数十キロ、高知の足摺岬に向かった。

高校になると、サッカー部の後輩と2人で四国を回った。1週間で800キロ超。未舗装もまだ多い旧道の、山高い峠を幾つも越える。ひたすら走るだけの旅であった。坊主頭の学生2人、珍しいせいか、夕暮れに道を尋ねると決まって家に来て泊まれと。当時の田舎町の人たちは、鷹揚さをもって軽々と招き入れてくれた。

今は遠く、その後を振り返ると、個展のため各地に赴き、半ば旅気分で過ごすことはあっても、純粋な旅はほとんどしていない。

人はなぜ旅をするのだろう。気分転換のちょっとした近場の旅。余裕のある人たちは遠く名所を巡り、外国旅行もあたりまえ。観光地に着くやいなやスマホでパシリ。証しを残せば満足という人。のんびり物見遊山もあれば、巡礼など目的を持つ旅、経験や知識を求めて行く人も。また、冒険や探検といった挑戦的な旅もあるし、運命のように手繰り寄せられ、旅先で居着いてしまうことだって。

スタイルは人それぞれ。

刺激、癒やし、忘我、傷心、見知らぬ地への興味や、移動そのものの愉楽。日常からの脱出、逃亡者であるかも。ただ、いずれにしてもまずは戻ってくる前提あっての旅。みんな家に帰る。

しかし、僕が夢想するのは帰らない旅だった。すべてをかなぐり捨てて行く目的地もない場所。そんな気がムクムク起きてはまた萎む。若いころからの繰り返しがあった。だが僕は行かなかった。そして行かない人間だと知った。

絵を描く中で、今日、この日に画期的な何かが起きるかもしれない。その期待と不安が画室を出づらくさせる。旅に限らず「さあ明日は休みだ！」などと解放される感情は、早くからなかったように思う。

〝遠くへ行きたい〟とは旅の核心であろう。だが僕にはもう遠くへはない。身近なありふれた道を歩く極少の旅。そんな感覚を知らない間に身につけていた。未知なるものはすぐ側に。次の角を曲がればまた光るものが…。

（吉田　淳治・画家）

愛媛新聞 :朝刊 2020/09/20 面名:文化 ページ:018

(C) 愛媛新聞社　無断転載、複製及び頒布は禁止します。